



雄大な富士山の姿は、古くは竹取物語や万葉集の和歌の数々から現在にいたるまで、多くの文学や絵画に描かれています。また、富士山にまつわる伝説や伝承も数多く残されており、我々の精神と深く結びついています。このように、愛され、敬われてきた富士山は、日本文化の創造に欠くことができない存在であり、富士山の与える影響ははかりきれません。

「春乃靈峰」 横山大観

信仰(富士講・御師)登山の歴史

富士講の隆盛

富士講の祖は長谷川角行という富士行者で、この世と人間の生みの親は「もとの父・母」すなわち富士山が根本神であるとし、江戸とその周辺の庶民の現世利己的な要求にこたえて富士講の基礎を形成しました。その信仰は村上光晴の光晴派と、食身身祿へと受け継がれる身祿派の二派に分かれました。光晴は北口浅間神社の修理をしたことにも示されるように、財力によって身祿派を凌駕しており、吉田では、「乞食身祿に大名光晴」と言っていたといわれます。その後、富士講は大きく発展し、「江戸は広くて八百八町、八百八町に八百八講」と言われるほど数多くの枝講を生み出しました。

富士御師

富士山北麓の山梨県側には、河口や吉田に御師宿坊が成立します。御師とは参詣者への祈祷に加え、自分の住宅を宿坊に提供した人のことで、富士御師も登拝者に対して、祓いや祈禱のほか、住宅を宿坊に開放していました。河口御師は、おもに西関東から中部高地を檀那所(檀家)とし、吉田御師は古くは東関東をおもな檀那所としていました。吉田では、江戸時代の後半代に86軒の御師が存立しました。このうちの旧外川家は代表的な御師で、その住宅は、国の重要文化財(建造物)に指定されるとともに、世界遺産の構成資産ともなっています。

富士山の登山道

江戸時代に編さんされた『甲斐国志』によると、その当時の登山道は、北に吉田口(富士吉田市)、東の須走口(静岡県小山町)、南口にあたる大宮口(同県富士宮市)・村山口(同左)の各々からの四道でした。吉田口と須走口は八合目以上で合流し、そこを大行合と称していました。それ以外の登山道に須山口(同県裾野市)と船津口(富士河口湖町)がありましたが、須山口は宝永4年(1707)の大噴火の影響で廃道となっていました。明治16年(1883)に御殿場口登山道が開設されるにあたり、この道は須山口三合目に結び付けられました。北面の山梨県側では、御師集落である河口(富士河口湖町)から船津を通過して山頂へ向かう登山道がありましたが、山崩れによって江戸時代には廃道となっていました。また五合目の小御岳から屏風岩を経て白山岳へ直登する「ケイアウ道」と称される道や、北西麓の精進口登山道(富士河口湖町)に加え、富士河口湖町大風からの登拝路もあったとされます。

また吉田口登山道六合目を起点として、中腹を一周する御中道という巡拝路があって、もっぱら中道巡りに用いられていましたが、今日では大沢付近が通行不能です。



諏訪森の富士山大鳥居



「夏乃靈峰」 横山大観

北口(吉田口)登山道

富士山に集う人々の宿坊をなしていた吉田宿(富士吉田市上吉田)の南限に諏訪森があり、そこに北口本宮富士浅間神社がまつられています。登山道はここを基点に富士山頂へ延びています。ここから馬返までが「草山三里」と俗称されて、森林限界にあたる五合目の天地界までの木立の道を「木山三里」といい、その先の頂上までの樹木のない焼石の道を「焼山三里」といいます。草山と木山の境に鈴原大日(鈴原神社)が、近接する御室に御室浅間神社が祭祀されます。木山と焼山の境界天地界に中宮社・中宮大日まつられ、浅間大菩薩とその本地仏の大日如来が奉納されました。大行合(現在の本八合目)より上位は奥宮の神域とされ、昔から信仰上の大きな境界とみなされてきました。富士道者の登山は御山を汚さないように垂直的に区切られた信仰空間をすばやく登頂し、そのまま下山する方法をとっており、登山の大衆化とともに、登拝の目安として旧来の信仰地を基礎として合目が設定されていきました。

富士山禪定 富士山に代表されるような霊山に信仰登山することを禪定といい、また登拝の最終的な到達点である頂上のことを禪定と称することもあります。室町時代には、先達引率されて一般の人々も盛んに登山するようになります。そのような登山者を道者といい、この時代の記録である『勝山記』の中には、明応9年(1500)の条に「富士へ道者参ること限りなし」という記述があります。

富士山クイズ

Q6:ヘリコプターやブルドーザーのない時代に、人力で荷物を富士山の高所へ運んだ人達を何と呼んだ?

① 強力 ② 搬送人 ③ かつぎあげ (答えは16ページ)



富士講のお焚きあげ

富士山の遺跡・文化財

吉田口登山道一合五勾の目安とされていた鳥居跡を過ぎるとすぐに登山道の右側に数段に削平された場所に出ます。ここは上吉田の時宗寺院・西念寺塔頭のひとつ定禪院が存在したところでした。山梨県文化財に指定される西念寺の薬師仏(釈迦如来立像)は、この定禪院の本尊であったと伝えられます。

吉田口登山道五合五勾に位置する経ヶ岳には鎌倉時代に日蓮が經典を埋納した場所とする伝説があって、それにちなんで経ヶ岳と称されてきました。大正13年にここから経筒と経巻が発見されました。経筒には10巻の経巻が納められており、のちに1巻が開かれました。法華三部経の結にあたり、頂上三ヶ岳から出土した平安時代の経巻と同じように、朱書で書写されていました。

富士山八葉と懸仏

山頂を八葉の蓮華に見立てる修験系の富士信仰があります。オハチ(お鉢)造りとは、本来は「お八葉造り」のことなのです。内院(噴火口)の大日如来を中心として、外輪の峰々に八仏を配するもので、その認識に基づいて仏像や懸仏が奉納されました。室町時代の文明14年(1482)には「総州菅生庄木佐良津郷(千葉県木更津市)の信仰者が八枚の懸仏を奉納し、現在、そのうちの二面が出土しています。一面は虚空蔵菩薩像(富士山本宮浅間大社蔵)で、もう一面は不動明王像(富士吉田市歴史民俗博物館蔵)を鑄出したものです。

富士の文学・伝説

富士山の文学

富士山は詩歌・物語・紀行文などにしばしば登場します。奈良時代には福慈岳(『常陸国風土記』)、不尽の高嶺(『万葉集』)などと記されます。平安初期には都良香の「富士山記」(『本朝文粹』)が生まれました。同書は都で記され、都人の富士山に対する認識を示すものですが、実際に見聞した者に取材して記されたようで、頂上の噴火口の記述など具体性をもっています。

『竹取物語』は不死の薬を捨てた山として「その山をふじの山とは名づけける」という山名の語源を説き、『伊勢物語』や『更級日記』も富士山の雪や煙のことを記し、その後の『海道記』等の作者が東海道を下る途中で富士山を見て歌を詠んでいます。

富士にまつわる伝説

富士山が周囲の山と高さを競ったという伝説がいくつかあります。例えば、富士山と八ヶ岳に樋を渡して水を流し、どちらに水が流れるかによってその高さを明らかにしたという伝承です。

これとは別に、富士山の出現に関する伝説もあります。孝霊天皇5年に、一夜にして大地が裂け大湖となって近江の琵琶湖ができ、そのときの土が大山となったので、もっこで運んできたのが富士山で、こぼれた土が近江の三上山だとする話です。

江戸時代の『甲斐国志』には、北口本宮富士浅間神社の背後にある大塚山は、日本武尊が東征の帰りに富士山を選擇したところだと記されます。

『日本霊異記』には伊豆大島に流された役行者(富士山を開山したといわれています)は昼は島にいるが、夜は富士の岳に行つて修行したことが記されています。また27歳の聖徳太子が甲斐の黒駒に乗って富士山に登ったと記され、「聖徳太子絵伝」には富士山に馬で飛上る姿が描かれています。

富士山クイズ

A5:①本栖湖

富士山は五十銭札や五百円札など、古くから紙幣のデザインとして用いられています。2004年11月から流通している千円札には、1984年から流通していた旧五千円札と同じ、写真家の岡田紅陽が1936年初冬に本栖湖北岸の山の上から撮影した逆さ富士が基となっています。



「秋乃靈峰」 横山大観



「富士山巔籠略図」 富岡鉄斎



「聖徳太子絵伝」の一部(正福寺蔵)



「冬乃靈峰」 横山大観